

東京臨時第一陸軍病院における切断者スキー

中 川 一 彦

Amputee Ski at the First Tokyo Provisional Army Hospital

NAKAGAWA Kazuhiko

It is common knowledge that the late Sir L. Guttmann introduced sport as one of the medical treatments for the spinal cord injured at Stoke Mandeville Hospital in 1944.

This trend developed to hold the Stoke Mandeville Games in 1948, and now Paralympics is stemming from this movement as everybody knows.

On the other hand, it is not a matter of knowledge that in 1941, Dr. HORI and his co-workers of the First Tokyo Provisional Army Hospital introduced ski and other sport for the soldiers with artificial lower limbs in Japan.

Therefore, this report has presented amputee ski from his book; "Gishi ni chi no kayou made" (this means the vital artificial limbs in English).

Key words: Amputee Ski, HORI Kiyoshi, The First Tokyo Provisional Army Hospital.

1. はじめに

Jim Winthers によって書かれた世界初の切断者スキー教本『National Amputee Ski Technique』(1971)によれば、切断者スキーの始まりは1948年頃で、それは、オーストリアとドイツを中心とするものであるとされている⁵⁾。

ところで、我が国においては、1943年出版の『義肢に血の通ふまで』という書物の中に、スキーに関する記述があり、紹介されている¹⁾。

もちろん、我が国における長野パラリンピックの様な今日の発展は、1970年代以降のものであることは言うをまたないが⁶⁾、今まで知られることのなかった、第2次世界大戦中の我が国の切断者とスキーのことを、その本の内容に触れながら紹介していく。

2. 『義肢に血の通ふまで』について

この書は、保利清によって書かれ、1943年、汎洋社から5000部出版されたものである。

著者は、東京臨時第一陸軍病院勤務の陸軍軍医少佐で、大学卒業(1916)後、1919年、東京帝国大

学医学部整形外科教室で、現役の軍医として研究にたずさわり、そのときから、義肢の研究を始めた。

彼は、この事を以下の様に記している。

「大正五年に大学を卒へ、八年に東京帝国大学の整形外科教室に現役の軍医として研究を命ぜられて行ったときに始まる¹⁾²⁾」

保利清の師は、同整形外科教室初代教授田代義徳で、我が国最初の肢体不自由児の学校、柏学園の創設(1921)に際し、創設者柏倉松蔵を助け、東京市立光明学校(現、都立光明養護学校)の設立(1932)に尽力した人である²⁾。

田代義徳は、保利清に、義肢学を研究することを勧め、「兵隊は義肢を神棚にあげたり、壁に掛けたりして拝んでみると云ふ話だが、あれだけはこの際大いに改善して根本的に革新してゆかねばならぬ事だ。……(中略)……義足をほんたうに生かす事、これが外ならぬ君の責任だ¹⁾³⁾」と伝えていたのである。

3. 切断者とスポーツ

この書は、自序に続き、第1章義肢と私、第2章義肢訓練の実際、第3章隻脚兵士と共に生きる、そして第4章義肢訓練の理念から成っている。

この中の第2章の4に再起訓練があり切断者とスポーツの事が以下のように紹介されている。

「スポーツにしても武道にしても勝とうとすれば、いつの間にか自分を忘れてゐる。初めのうちこそ片足を踏んだりしてゐて一見して如何にも義肢らしいが、段々勝負が白熱してくると、夢中となり、無念無想となり、足の有無を忘れてくる。忘我の境で、無我の境である。そしてこの足の有無すら忘れてくると、もうどれが義肢やら見分けがつかなくなり、傍目にもこれが義肢のものとはとても思われなくなってしまう。籠球でも、野球でも、ホッケーでも、銃剣術でも皆さうである。相撲に至っては、義肢でもって立派にうちやちやを喰はせる者がある。……(中略)……ボートなどはグラグラゆれるので私などもちょっと怖い位だが、それを平気で義肢で乗るやうになるし、熟練したものに至っては投網さへ打つやうになる。また去年は、北国出身の者だけで志賀高原にスキーに行ったことであるが、滞在僅か三日間といふのに、初めの一日で雪の上を歩けるやうになり、二日目には可なり滑れるやうになったが、三日目など上手なものは義肢でシャンツェを飛ばすやうにまでなったのである。^{1)p69,70}」(写真1～3)

この他、本文中では、器械体操、登山、水泳、そして自転車再起訓練として導入され、自然に、楽しい雰囲気の中で義肢に体重を移し、歩行を獲得させていたのである。

4. 切断者とスキー

前節で紹介した「また去年は、北国出身の者だけで志賀高原にスキーに行った」は、この書の自序が昭和17年12月3日となっていることから、その前年昭和16年(1941年)ではないかと推察出来る。

このスキーの事については、「雪原の上は歩けるだろうが、スロープは滑れるかしらと思ったスキーでは、シャンツェを飛ばすやうな大冒険を敢へてする。私などあのシャンツェを見たらとても怖かったもので、両足がピンピンしてゐたにしてもあんな所を飛び降りる勇氣など到底出来ないのに、片足の者がやってのけるのだ。子供の頃やってみて要領は一応のみ込んでゐる。それにしたと

ころで、全くの大冒険だ。^{1)p137,138}」と書き、続けて、具体的な状況を以下の様に示している。

「もっとも初め三十分位は雪原に立ってゐて、一步も歩けない。鉄の脚では調子がかないらしい。それで、どうしてもよい方の足に頼り、それを前方に出す。すると、足の間が開いてしまふが、後方は鉄の脚だからスツと引くことができない。これを見て、私は云うた。よい方の足に重心を置かずに悪い方に載せてゐなさい、さうすれば雪は摩擦がないから、重心さへかけてやればひとりでに滑れる。間もなく滑れるやうになった。そして今度は調子がとれたので、悪い方の足からでも両方滑れるやうになった。かういふ科学的指導といふものは、こっちが暗示しないと兵隊にはやはり分からないのである。どうして歩けぬのか、その原因が皆目見当がつかないからだ。私はスキーには全然の素人なのだが、兵隊の滑つてゐる姿をみてゐて、これは重心の問題だなと直観したのである。^{1)p138,139}」

また、スキーを隻脚の兵士の再起訓練のひとつ



籠球

写真1



跳 躍



野 球



分 列 行 進

写真2

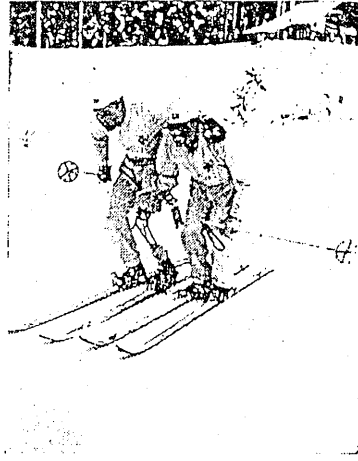
として導入したきっかけについては、「私もスキーまでやろうとは思はなかったのである。スキーに関するヒントを私にあたへてくれたのは一朋友の息子であった。この息子は足がわるく、陸軍病院で鉄の脚をつけた組であるが、つけてから幾日も経たぬに肝心の脚をこわして修理にやって来た。どうも変なところが毀れてゐるので、どうしたのだと聞いて見ると、雪の降った日にスキー

をやったのだと云ふ。冬の日のスポーツとしてのスキー。私は思はずせき込んで訊ねた。“滑れたのか。”すると友人の息子はハッキリと滑れる旨答へた。^{1)p139)}との体験を記している。

そして、「何んの躊躇もなく、私は義肢をスキー用に改造してつくらせた。やがて再び東京にも雪の日が来た。私は経験のある北国生まれの患者を選んで彼等にスキーを穿かせ、戸山学校の坂



箱根登山



スキー



富士頂上征服

写真3

で滑らしてみたのだが、大丈夫これは有望だと自信をもった。^{1p139,140}」と記されているように、彼は、今の東京都新宿区戸山町にあった戸山学校の通称「箱根山」という所で、隻脚の兵士にスキーを試みたと考えられるのである。

このような体験を踏まえ、彼は、兵隊を志賀高原に連れて行き、「三日の旅程を終って帰京したとき、スキーの実況を撮したフィルムを堀内中將にお目にかけた。^{1p140}」のである。

ちなみに、この事は、「義肢でシャンツェを飛

んだといふことは、当時海外に紹介せられたほどの驚異的な成果であった。^{1p141}」とあるように、ニュースとして広く知られていたようである。

ところで、彼の改造して作らせたスキー用の義足は、膝関節角度を調制する機能を備えたものであった。

この頃の義足は、鉄で出来ていたので鉄脚と呼ばれていたが、大腿切断者のための義足は、膝関節を持たず、スポーツなどには適さなかった。

(写真4)

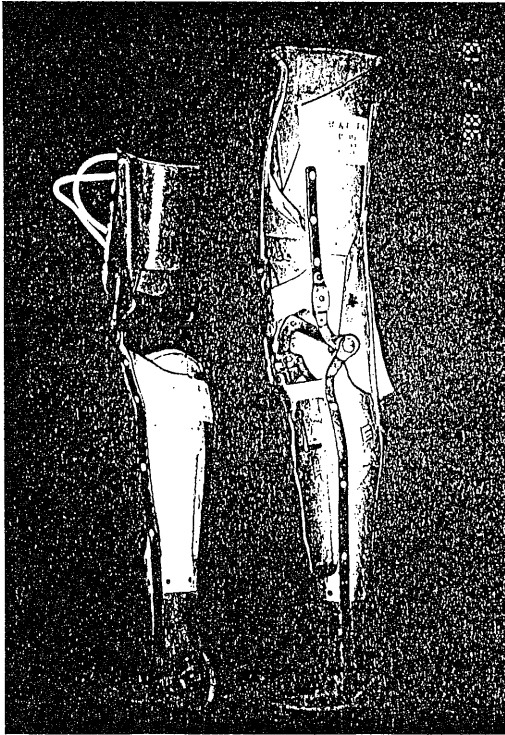


写真4 1940年頃の鉄脚
(右：大腿義足，左：下腿義足)

彼の改造した大腿義足の膝関節は、手動式の鍵で膝伸展145°あるいは170°で止めることが出来るようになっていた。その結果、大腿義足を着けた切断者も、坐った姿勢がとれるようになったのである¹⁾⁴⁹⁾。

彼は、このようにして、彼の師、田代義徳からの命「義足をほんたうに生かす事、これが外ならぬ君の責任だ。」を具現し、「義肢が単なる物だと

のみ思ったら、それを生きた體に接いだとてうまく歩行できるわけではない。義肢に血が通ひ、さまざまなスポーツ、武道に専念できるのも、義肢が単なる物資ではなく人の心が脈々と通ひ人も義肢も完全一體となる物心一如の境地に立ち、初めて義肢はわが身となり、虱が登ってくるのが分かるやうになるのであらう。¹⁾¹⁸⁶⁾」とまとめたのである。

5. まとめ

1944年、Guttmann L. は、ストークマンデビル病院においてスポーツを導入し、1948年、車椅子使用者のスポーツ大会として発展させ、現在のパラリンピックの母体となったことは周知の事実である³⁾。

一方、1941年、東京臨時第一陸軍病院の保利清などが、スキー等のスポーツを下肢切断者などの訓練の一手段として導入したことを知る者は皆無に等しい。

そこで、ここでは、彼の著『義肢に血の通ふまで』から、スキーの様子を紹介した。

参考文献

- 1) 保利 清(1943)：義肢に血の通ふまで、汎洋社、東京。
- 2) 中川一彦(1983)：柏倉松蔵と日本體育會體操學校の教育に関する研究、筑波大学体育科学系紀要、6：21-27。
- 3) 中川一彦(1997)：パラリンピック競技大会の夜明け、筑波大学体育科学系紀要、20：1-7。
- 4) 日本身体障害者スキー協会(1992)：スキー競技、日本身体障害者スポーツ協会、東京。
- 5) Winthers J.(1971)：National Amputee Ski Technique, National Amputee Ski Association, California.